

四天王寺悲田院養護老人ホーム

コロナ流行に伴う入院期間の長期化、ご利用者の活動機会減少に伴うADLの低下や措置そのものが減少することも重なり、稼働の低下を防ぐことができなかった。その中で、空床長期化の改善を行う為、令和2年度に中止していた養護特定への新規入所の再開を行い、訪問が可能な時期には積極的に措置元の市町村や、社会福祉協議会、救護施設に赴き関係作りを行いつつ、継続的に入所の案内を行うことで少しずつではあるが依頼、契約件数は増加してきている。またコロナ禍であっても安心、安全を確保しつつ、ご利用者に楽しみを提供する企画、行事を創り出すことに尽力した。

～事業活動報告～

(1) 専門性の向上、明確な課題設定とチャレンジ

各部署の支援長とリーダーが連携することで、各部署や委員会で立案した行事や活動について計画的に実施することができた部分もあり一定の成果は見られたが、うまく進めることができなかった部署もあり、予定通りの進捗とは行かなかった。資格取得については、介護福祉士、実務者研修受講等取得者が増加したものの、認知症や、転倒予防など施設として底上げが必要な研修について積極的な参加を促すことができていなかった為、令和4年度はZOOMでの研修も活用しつつ強化を図る。

(2) 『楽しみのある生活』を創り出す仕事体制

『生き物を飼う暮らし』を継続しつつ、コロナ禍ではあったものの、花火大会や納涼祭などの従来の行事は継続し、新規の企画として、保育園児とのシャボン玉大会や訪問衣類販売、ローソンを活用した訪問販売等、ご利用者のニーズに合った新しい企画についても実施することができた。また、計画はしつつも感染者の増大により実施できていない企画についても、令和4年度に活かすことができるようにしており、成果として残すことができた。

(3) 職種と部署の機能を高め、共有する価値観に向かう

事務、支援、相談、各長の抱える業務の明確化、細分化をすることでその偏りについては軽減することができた。ただ、令和2年度から課題となっている総務事務の機能強化という部分についてはスタッフの退職もあり引き続き課題が残っている。

～改善活動～

(1) 転倒への徹底した取組

福祉用具の積極的な活用や、支援員がご利用者の足のサイズを計測できるよう器具を導入することで、迅速に本人にあった靴の購入を行うことができるようになり、転倒予防に対する意識は少し高まったが、立案した転倒予防対策を継続して行えておらず、同様の事故の発生が多く見られた。

(2) スタッフの増員に伴う適切な育成

外国人スタッフの受け入れについては、悲田院養護の環境にも馴染み、着実にスキルアップしているが、SNSを通したトラブルもあり、今までしてきた以上に、よりきめ細やかな把握やサポートが必要であることを痛感した。令和4年度は新たに2名の外国人スタッフの配属も見込まれているのでその反省を活かした上での対応を行っていく。